

---

## コメント

---

### 砂川有里子 コーパスを活用した日本語教師のための類似表現調査法

本誌前号の山内論文を受けて、この論文では、日本語教師が類義表現の違いをコーパスを使って自力で明らかにする方法が詳しく述べられている。具体的には、実質語についてのNINJAL-LWPと、機能語についての中納言の使い方が詳しく取り上げられている。筆者が述べているように、コーパスがあれば何でもできると考えるのは誤りだが、一方で、コーパスを使いこなすことで、学習者に対する説明に深みが増すことも確かである。前号の山内論文と合わせて、今後の日本語教育における類義表現研究の方向性を示す好論文。(1)

---

### 高梨信乃 上級学習者のテイル形使用にみられる問題点 ——文法指導の隙間

上級者が間違える文法項目には、実は「テイル形」のような一見初級文法項目と思われるものの間違いが多い。この論文で筆者は、そうした誤用や非用が起こる原因が、これまでの「文法指導の隙間」、つまり、学習者にとってわかりにくい表現が明示的に教えられてきていないことにあることを具体的に論証している。(1)

---

### 江田すみれ 設定時点が未来の「効力持続」 ——未来まで広がる「ている」の用法について

母語話者にとっては当然の用法が学習者にとっては難しいことがある。「50メートルほど先にバス停があります。そこで待っててください」という文もそうしたものの一例である。この論文はこうした文を「未来まで広がる「ている」」として、その許容度について詳しく考察している。(1)

---

### 澤田浩子 知覚・思考・判断・意志を表す「文末名詞文」の使用実態 ——コロケーションから文型へ

「私はこの方法がダイエットに有効なら今日からでも実行する考えです。」という文は、「\*私は考えです。」と言えないという点などから、「文末名詞文」と呼ばれている。この論文では、言語学的な研究において広く論じられているこの「文末名詞文」について、BCCWJのデータを用いて、日本語教育にとってどのようなものが必要かということを実証的に検討したものである。この表現は全ての日本語学習者にとって必要だとは言えないにしても、上級、さらに超級を目指す学習者にとっては必要度が高いものとも言える。言語理論と日本語教育の相互交流のための具体的な方法を提案した好論文。(1)

森 敦子 可能を表す「見える」「見られる」の用法別使用傾向  
—— コーパスに見る母語話者と非母語話者の使用の異なり

可能を表す「見える」と「見られる」の使い分けは学習者にとって難しいものであり、これまでもいくつか研究がある。この論文では、用法別に、母語話者コーパスと学習者コーパスを調べ、学習者の誤用や非用がどのタイプの多いかを調べている。さらに、日本語教科書も調査し、そうした誤用や非用（のかかなりの部分）が日本語教科書の影響による可能性があることを指摘している。(I)

山下由美子 「しよう」の意味・用法  
—— 〈非難〉・〈願望表出〉の「しようよ」

この論文は、勧誘や意志を表す「しよう」が、「よ」を伴った場合に、非難（例：それ、早く言おうよ）や、願望表出（例：みんな、もっと来ようよ～）を表す場合があることをする。意向形および終助詞「よ」の表すモダリティの意味・機能の新たな一面が指摘されるとともに、丁寧に記述されている。(M)

宮永愛子・松田真希子 聞き手配慮要素からみた  
超級日本語話者の発話の特徴

超級学習者の言語特徴がどのようなものであるかについては、研究が始まったばかりだが、この論文では、コーパスを用いて、フィラー、言い直し、終助詞を切り口にこの問題に取り組んでいる。その結果、例えば、フィラーの使い方では、上級学習者は適切な発話を探すためのつなぎとしてしか使えていないのに対し、超級学習者は聞き手の理解に配慮した形でフィラーを使っている、といった違いが見られることが明らかになった。(I)

久好孝子 書き言葉における談話と文法の一考察  
—— 項の形式・文法関係・意味の相互関係から

類型論の研究の中で、「単一語彙項の制約」と呼ばれる現象がある。簡単に言うと、1つの文の中で語彙的な形で現れる項（必須補語）は1つが基本である、ということである。これは英語のように「省略」が難しい言語だけを見ているとわからないが、日本語のように「省略」が一般的な、世界の多くの言語では普通に見られることである。この論文では、この原則が日本語の書きことばでも見られることをコーパス調査によって明らかにしたものである。つまり、他動詞文では、主語は「省略」されやすく、目的語は「語彙」的な形で現れやすい。その結果、1つの文の中に語彙的な形で現れる項の数は1つになるのである。この論文は日本語における「省略」の意味について考えるための基礎的データを提供している。(I)

---

李 国玲 疑問形式による改善要求表現の日中対照  
——話者と事態との関わり方から

現状に対する改善要求表現を、意志要求（例：静かにしてくれる？）、可能要求（例：静かにしてもらえる？）、許可要求（例：静かにしてもらってもいい？）の3種に分類し、日本語と中国語を対照させた研究。日本語は授受動詞の使用によって話者が介在し、その視点から表現するのに対し、中国語には、話者が介在する表現としない表現があることが指摘されている。（M）

---

ミースワシ モンシチャー トルとモツの意味分析  
——「手にする」と「自分のものにする」の  
意味概念を中心に

「本を手にとる／もつ」のように類義関係にある「とる／もつ」について、認知意味論の立場から分析した論文。トルは「自分の領域へ移動させる」ことに焦点があり、モツは「状態を継続的に維持する」ことに焦点があることが明らかされている。（M）

---

時岡範子 新聞の中の混種語の使用実態からの一考察  
——語種構成の視点から

「和語・漢語・外来語」と並ぶ語種の1つである「混種語」に注目した研究。新聞を資料に今日の混種語の実態を考察し、混種語は各語種の意味的・統語的特徴を生かして造語されていること、外来語が増えてきていることで「漢語と外来語」の混種語が増加していることを、質的・量的に明らかにしている。（M）

---

金 蘭 中国人日本語学習者における複合動詞の習得  
——文産出に見られる誤用およびフォローアップ調査をもとに

複合動詞に関する研究は数多いが、この論文では、複合動詞の前項と後項の関係に着目して、複合動詞を5種類に分け、それを意味の抽象度（部分の意味から全体の意味が予測できるかどうか）の観点から配置し、それぞれについて、文産出テストとフォローアップインタビューを行っている。本論文には日本語教育における複合動詞の扱い方を考える上で参考になる知見が含まれている。（I）

喬 曉筠 ビジネス場面に見る敬意表現の使用傾向  
——日本語母語話者と台湾人日本語学習者の比較

日本語母語話者と台湾人日本語学習者のビジネス場面での会話を資料に、敬意表現の使用傾向を分析した研究。学習者は敬語を習得しつつも定型表現にとどまり、「ほう」や「なる」などの間接表現が有意に少ない。また母語話者には丁寧さの低い表現を用いる傾向が見られ、それが肯定証拠として学習者にインプットされ、その習得に影響を及ぼす恐れがあることが指摘されている。(M)

施 信余 対面接触場面における調整行動  
——台湾人日本語学習者と日本語母語話者の会話より

日本語母語話者と台湾人日本語学習者の自然会話における調整ストラテジーを考察した論文。話の内容により、母語話者が言語ホスト、学習者が言語ゲストという固定的関係が崩れる場合があること、母語話者が修正や確認を求める場合の一つに、学習者の方が多くの情報や知識を持つ場合があり、両者のコミュニケーション上の問題は学習者だけにあるのではないという興味深い指摘も見られる。(M)

居 關友里子 レジュメ表現から口頭表現への置き換えの必要性  
——日本語学習者による学術的発表のために

発表経験の浅い日本語学習者が学術的口頭発表において、レジュメの表現をどのように口頭表現に変えるべきか、について考察した論文。そこで、文体に関する知識の一つとして、口頭表現での接続表現と副詞の出現についてコーパス調査を行った。その結果、論文内で使用頻度の高い表現の多くは口頭表現にも一定数出現しており、レジュメの表現をそのまま使用しても問題とならないことなどが示さるなど、現場の具体的な教育活動に生かせるデータが示されている。(M)

今村和宏 能動的読みへの気づきと意識化に重点を置いた速読学習  
——読みの速度と深さを同時に向上させる条件

どうすれば効果的な「速読」を指導できるか。これは多くの日本語教師が持つ疑問であろう。この論文は、この疑問に極めて実証的に答えている。4年間の授業実践の内容と、その指導効果について緻密に綴られており、学習者がどのようなプロセスを経て「速読」の技を身につけていったかを読者が追体験できるようになっている。授業実践報告として極めて高い到達度を示す好論文。(I)

---

高岸美代子 高等学校における韓国人留学生の実質的でない発話への  
気づきを促す授業  
—— 談話分析を利用して

日本の高校で学ぶ留学生が、日本人の発話に見られるあいづちや文末表現、フィラー、笑い、イントネーションなど「実質的でない部分」の重要性に気づくことを促すために行った会話授業の詳細が論じられている。日本人学生との混合クラスにおいて実施し、実際の会話データを教材として用いるなど、新しい授業の詳細が紹介されている。(M)

---

遠藤知佐 日本語ボランティア向け研修の実践検証からの提案  
—— 整合性を備えた構成と省察を取り入れることの重要性

今後、ますます重要性を増すことが見込まれる地域日本語活動におけるボランティアを取り上げ、その研修に関する実践報告論文。学習を単なる知識や技能の獲得ではなく、意識・価値観・行動の変容であると捉え、受講生の省察を重視することの重要性が述べられている。今後の研修に対して具体的な示唆が考えられている。(M)

---

大原哲史・トムソン木下千尋  
日本語を使用する場としての教室での内化を考える  
—— オーストラリアの大学の初級日本語授業の分析

オーストラリアの大学の初級日本語授業で行われた「日直」活動（＝授業における教師の補佐的役割）についての実践報告論文。活動を通して、日直だけでなく、他の学生も日本語を使い、相互に対話する機会が増えたことから、初級であっても、また、教室環境であっても、日本語の学習がそれにとどまらず、何らかの目的を達成するために日本語を使用する場とすることができるのではないかと、ということが具体的に示されている。(M)